

中国における女子教育の発展と ミッションスクール

—清末から五・四時期まで—

佐藤 尚子

はじめに

1842年、南京条約による五港開港の頃より、欧米諸国のキリスト教宣教会は、中国への伝道活動を次々と開始するに至った。中国に上陸した宣教師達は、中国人との接触の場を求めて、いわゆるミッションスクールを中国各地に設立した。キリスト教を教え、西洋人教師の主導するミッションスクールは、中国政府の公認出来るものではなかったが、中国近代教育の全体的遅れの中で、多くの中国人子女を集め、その数を増やしていった。

やがて1920年代後半になると、中国全土にナショナリズムが高揚し、これらのミッションスクールは欧米列強の中国侵略の手先であるとして、激しい糾弾を浴びることになる。そのため、外国のミッションスクールから中国のキリスト教主義学校への転換を余儀なくされるが、同時に、私立学校としての公認を得て、中国公教育を補完する地位を築いていった。しかし、やはり社会主義革命の際に、外国依存の本質を非難され、遂にその活動の幕を閉じなければならなかったのである。

このように約1世紀に渡り教育事業を継続した中国ミッションスクールに対して、帝国主義列強の中国侵略の道具であるとする非難の声は高いが、しかしまた、それらの学校により長期に渡る教育活動が展開されてきただけに、ミッションスクールは中国近代教育の成立と発展の中で一定の役割を持ったと考えられる。本論は、ミッションスクールによる女子教育を取り上げ、中国における近代女子教育の発展の中で、それらがどのような位置を占めたのか

を明らかにし、その果たした役割を分析しようとするものである。

1. ミッションスクールによる近代女子教育の導入

(1) 中国における伝統的女子教育

19世紀半ば、中国の女子教育はどのような状況であったのであろうか。女子教育に関する世界で最初の書物は、中国に於てであったという指摘はあるものの、⁽¹⁾旧中国の女子教育は全く軽視されていたといえる。教育の主要な目的は科挙をパスし役人になることであったから、女子には教育は閉じられた道であった。けれども全く教育を受けなかったわけでもない。上流家庭の私塾に家族の女子が参加することは稀でなく、また、兄弟のため家庭教師から学ぶこともあった。しかし、大多数の女子は、読み書きの訓練を受けることなく、家事、家政、礼儀、育児についての知識や技能を生家や婚家で教わることが教育のすべてであった。⁽²⁾

このような女子教育の状況は、19世紀末まで続くのであるが、その背景には、儒教の女性観があった。儒教は、陰陽・剛柔の理を用いて、女性の地位を男性より一段低く位置づけるのであり、女性に独立した人格を認めず、その地位は極めて卑賤なものとした。⁽³⁾その結果、中国社会は数千年来総て男子の独占するところとなり、教育もまたそうであった。男女の教育の不平等や不一致を疑問に思うものもなく、まして女子教育を重視するものもなかった。

1842年の南京条約による5港開港後も、依然として女子教育は停滞したままであった。しかし、20世紀にはいると義和団事変の終息と共に、一気に欧化の風潮が進み、西洋型教育への需要が急速に中国全土に高まった。相次いで中国人による女学堂開設がみられ、1901年には上海の務本女学堂、1902年には蔡元培により同じく愛国女学堂が設立されている。清朝政府はやっと教育近代化への重い腰をあげ、1902年、欽定学堂章程が發布された。これは近代学校制度の導入と開始を告げるものであったが、ここには、女子教育に関する規定は全くみられない。翌々年の奏定学堂章程發布の際に、家庭教育法章程が設けられたのが、女子教育に関する最初の規定であった。⁽⁴⁾しかし、女

子はただ家庭においてのみ教えられると規定されただけであった。この章程第10節は、その理由を、女子が西洋の書物を読むと西洋の習慣や自由恋愛に染まり、父母や夫を蔑視するからであるとしている。清朝政府は新しい国民国家を建設するに当たり、全体構想の中に女子教育をいかに位置づけ、それに如何なる程度までの働きを期待しうるかについて、社会体制維持のための守旧的役割を期待するに留まった。依然として婦徳の涵養を中心とする伝統的女子教育論の範囲を越えるものではなかったといえよう。

(2) ミッション系女子教育の開始

女子に対する学校教育は、中国においては欧米宣教会により導入されることになった。それは、1842年の南京条約をきっかけにして始まった。先ず、そのころの状況を概観してみよう。

中国に到着した宣教師の妻や女性宣教師達は、中国人との接触の場を求め、すぐに女子のための学校を設立・運営した。その最初の学校は、1844年寧波に設立されたアルダーシー⁽⁵⁾の学校である。彼女は、1834年結成のイギリス聖公会「東方女子教育協進社」により派遣された最初の宣教師である。アルダーシーは1837年、ジャワ島スラバヤに華僑女子のための学校を設立したが、南京条約による5港開港後間もなく寧波に移り、学校を設立した。その経費全ては、彼女の収入により賄われた。以後、美以美会、長老会などにより次々と女子のための学校が建てられていった。1847年-1860年の間に11のミッション系女学校が開港場に開設されたという⁽⁶⁾。

では、これらの女学校は順調な教育活動を展開できたのであろうか。大部分の宣教師は、中国の伝統について無知のまま、西洋風の習慣と理念に従って、学校を設立・運営したのであったが、女子に対する学校教育は、中国社会にとっては、革命的なことであった。10才を越えた女子の外出禁止と、早婚の風習がある中での生徒募集は、困難を極めた。宣教師たちは街頭へ出ては、生徒を集めてきたが、生徒の大部分は、捨子、乞食の子、奴隷少女、最貧困の家庭の子たちであった。彼女達は、衣食を求めてやってきたが、その外に、書籍、交通費、文房具まで支給した。もちろん授業料は無料であった。

それでも、途中で逃げ出す子が大勢居て、学校開設を断念した例もある。また、現金を毎日渡すことで、生徒を引き留めた例もある。⁽⁷⁾

この様な状況であったから、各学校とも、生徒数は僅かであった。たとえば福州の美以美会女学校は、1859年開設の数カ月後、女子1名を確保したが1年後でも8名の在籍者を見るに留まった。⁽⁸⁾アルダーシーの女学校でも、1年後18名、8年後40名が在籍しただけである。⁽⁹⁾

このように、生徒がなかなか集まらなかったのは、女子教育のみならず外国人に対する偏見や疑惑が手伝っていたからである。ミッション系女学校は、「子供の目玉を取って薬にする」「外国人は悪魔であり、子供に悪魔の心を植え付ける。」と、当時しばしば言われたのである。また、纏足禁止を入学の条件とする学校が多かったことも、生徒募集を困難にしていた。纏足をしないために、よい結婚が出来ないかもしれないという理由で、信徒でさえもその娘を学校へやることに積極的でなかったのである。

以上のように、初期のミッション系女学校は、小規模で教育設備も質素なものであった。教育内容も簡単なもので、中国語の読み書き、算数、キリスト教の教授が中心であったが、中には、寧波の長老会女学校のように、天文学などの自然科学を取り入れ、上述のような迷信の打破に役立てたところもある。⁽¹⁰⁾また、体育の導入もみられたが、これは中国伝統の女性観からみて画期的なことであった。そしてまた、纏足の悪習を是正するために有益であった。

さて、欧米列強の中国進出と、宣教会の中国伝道が本格的になる19世紀末になると、中国社会は徐々に開かれていき、ミッションスクールへの需要が高まるとともに、ミッション系女学校も迅速な発展を見せることになる。1896年にはミッション系女学校 308校、生徒 6,798名に達する勢いであった。前述の福州美以美会女学校は、1872年30名、1887年60名、1898年には144名に増加している。⁽¹¹⁾応募者が多いため、1897年には50名が入学を許可されなかったということであり、設立当初とは大違いであった。その様ななかで、衣服の配給を取りやめたり、授業料を徴収したりすることも出来るようになって

た。

カリキュラムにも一定の進展がみられた。刺繡、編物、レース編みを教えて、これらの製品の販売により、学校の経費の足しにすることがよく行われたようである。その他、家事科や中国古典がカリキュラムに加わった。また、英語、音楽を追加して、普通教育の拡大を計る先進的な女学堂も現れた。⁽¹²⁾

このようなミッション系女学校の発展の中で、中等教育を開始する学校も現れた。聖職者の妻や聖書学校の教師として働く中国婦人の需要が高まったからである。後の華北協和女子大学の前身となるブリッジマンの学校がそれである。この学校は、1864年、公理会エリザ=ブリッジマン⁽¹³⁾によって設立され、30年間初等教育を展開していたが、1895年、中等教育を行うブリッジマンアカデミーを開設している。また、東呉大学付属第2中学となった上海中西女塾⁽¹⁴⁾は1892年、林榮知⁽¹⁵⁾がかかわり、海淑徳女史を校長として初めから中等教育を開始した学校であった。当初は5名しか入学者がなく、1900年の最初の卒業生はたった3名であった。しかしその後は、学生数が増え、医学界、学界、教育界、慈善事業などで活躍する女性が多数ここから育ったのである。1920年、中国政府がアメリカへ派遣した29名の女子学生のうち、13名はこの出身であった。⁽¹⁶⁾

(3) 近代女子教育の開拓者としてのミッション系女学校

以上概観したとおり、19世紀半ばごろから末期にかけて、欧米宣教会は数多くのミッション系女学校を設立したが、中国人でその後を追ったものは少ない。やっと1897年頃、清朝の改革と強化をめざす康有為や梁啓超が、女子教育に関心を見せるようになったに過ぎない。梁啓超の『変法通議』は、女学についての章を設け、女学は教育の母であり、教育は強国の基であるとして、女子教育を提唱している。彼と康有為とにより設立された上海の女学堂は、1898年、上流階級の生徒16名を集めて開校したが、清朝保守派の西太后により翌年、閉鎖を命じられるような状況であった。

このようなわけで、最初のアルダージーの学校以来50年以上も、中国の女子のための学校教育は、宣教会によるのみであった。中国近代女子教育の発

展に対して、ミッションスクールはその開拓者としての功績が高く買われなければならないであろう。そして20世紀に入っても、ミッション系女子教育のリーダーシップは変わることがなかったのである。

1907年初め、上海では既に12校の女学校が中国人によって開校され、生徒計800名以上が学んでいた⁽¹⁷⁾。この様な女学校に対して、ミッション系女学校がリーダーシップを発揮したのは当然であった。梁啓超らによる上海の女学校は、チモシー＝リチャード夫人や林樂知の娘により実際に設立・運営され、10人の外国婦人が参加していたという⁽¹⁸⁾。ミッションスクールをモデルに学校施設が整えられたり、女性宣教師が各地の中国人女学校に教師として招かれたりしていた。ミッション系女学校への参観者も多く、これらの学校と中国人女学校との親密で友好的な関係がみられたのである。ミッション系女学校の卒業生もまたよく訓練された教師として歓迎されていた。中国人女性教師は未だ育たず、教師不足は顕著であった。日本人女性教習を迎える学校もあったが、通訳が必要であるという不満から、次第にミッション系女学校の卒業生が採用されていったようである。

このようにミッション系女子教育は、中国女子教育の開拓者として、そのリーダーとして活躍したのであった。宣教会以外に女子教育に手をつけるものが少ないと言う当時の状況の中で、この分野は、欧米宣教会がもっとも進出しやすかったからである。

2. ミッション系大学による女子高等教育の開始

(1) 清末民初に於ける女子教育の制度化

20世紀に入っても、この様に男女の教育の甚だしい不一致は殆ど疑問視されず、中国学校制度上、女子教育は全くその地位を持っていなかった。しかし1907年、女子教育がやっと中国教育制度に算入することとなった。同年「女子師範章程」36条「女子小学堂章程」26条が發布され、女子教育が国民教育制度の中に組織されたのである。遅ればせながら、清朝政府は女子教育の動向が国家の発展に関わることに気が付き、女子のための学校教育の必要

性を認めたのであった。

しかし、その教育は依然として厳格な格別主義を取り、男子との間に著しい差を設けていた。先ず第1に、男女の別学を原則としていた。江蘇省では、男女生徒の休日が同日ではなかったという。⁽¹⁹⁾第2に、女子小学堂・師範学堂の何れも男子のそれに比較し、1年少なかったことである。また女子中学の規定はなく、女子教育は師範学堂が最高であった。つまり、女子には男子と同等な教育は必要なく、しかも男女の教育を完全に分離しようとするものであった。

「女子師範章程」の「立学総義」の第1章によれば、女子小学堂の教師養成は、家計を助け、家庭教育に有益であるためとしているだけである。新時代の国民教育に不可欠なものとしての女教師養成という意気込みは見あたらず、一時的な間に合わせとしての女教師論が展開されているだけである。『中国現代女子教育史』を著した程謫凡は、上述二つの章程は、男子教育の外に別に女子教育専用の系統を作るもので、「両性双軌制」がここに確立されたとしている。⁽²⁰⁾ともあれ、女学堂の設立はここにラッシュを迎え、1907年、391校を数えていた。女子生徒は11,936名に達していたが、全生徒の2%に過ぎなかった。⁽²¹⁾

中華民国成立後、直ちに発布された壬子癸丑学制は、更に女子教育を推進するものであった。官僚養成の人材教育、経典中心の人文教育から、男女を問わず国民の培養をめざす国民教育が実施に移されたからである。教育内容、修学年限には男女の別をもうけず、女子教育は共和国発展の基礎とされたのである。

しかしそれはただちに男女共学を意味したわけではなかった。初等小学校における男女共学は認められていたものの、高等小学校においては、男女は別の学級を作らなければならなかった。1916年の国民学校令では更に後退して、初等小学校第1・2学年に男女共学を認めているに過ぎない。⁽²²⁾カリキュラムも男子のそれとは異なっていた。教科書は女子用に作られたもののみが使用されたという。

この様に完全な男女平等教育を見るには至らなかったが、女子の教育要求は日増しに高まり、女子生徒の数は、突出的に増えていった。今や、中国女性性は字の読めないことを恥しがるようになり、両親は、娘に高い教育を望むようになった。

(2) ミッション系女子大学の設立

中国政府が女子教育事業に本格的に取り掛かったことは、ミッションスクールの活動の終了を意味するものではなかった。反対に、このときほどミッションスクールの教育が必要とされた時期はなかったであろう。ミッションスクールの女子卒業生はミッションスクール関係のみでなく、よい給料で、官公立や非教会の私立学校へ教師として就職していった。ミッションスクールに対する長い間の偏見もうすれ、その在籍者は増加し、高級官僚の娘も入学するようになっていた。障害に直面し、困難に耐えた時代から一転して、女子教育への貢献を高く評価されるようになったのである。今やミッション系女学校は、決して小さな学校ではなかった。どの程度まで拡大できるのか、効率的な学校運営とはなにかが論じられる時代となった。各施設を整備し、より上流の女子を確保することにより、キリスト教の影響を拡大しようとしていた。

中国社会に於て有用で影響力ある女性を養成するためには、高等教育を開始して完全な教育を実施しなければならないと考えられた。特に師範教育の分野では、その必要性が強かった。新中国建設のための教師の需要は年々大きくなるばかりであり、よい教師には大学卒業のレベルが必要であった。1907年以来建設された多くの女子師範は、そのいずれも中等教育レベルであり、促成で表面的な学習に終わっていると感じられた。また、せっかく設けられた「女子高等師範章程」は名のみであり、未だ実施に移されていなかったからである。

既に1905年、嶺南大学は非公式に女子の入学を許可していたが、⁽²³⁾宣教会による女子大学として、中国女子高等教育の先駆者となったのは前章で述べたブリッジマンアカデミーを前身とする華北協和女子大学である。この学校は、

義和団事変で多数の生徒の死者を出し教育活動を停止していたが、1904年、北京公理会・ロンドン会・長老会協和事業の高等教育機関として再開されることになった。翌年、校名を華北協和女子大学と称し、少数の者に高等教育を提供した。1909年に最初の卒業生4名を出し、次の年8名、1912年20名と次第に卒業生を増やし続けた。4年制の正科は文科、理科、神学科の3科であったが、2年制の専科を併設し高等師範科、幼稚師範科、音楽科などを開設していた。やがて1920年、男子校の華北協和大学と合併し、燕京大学女子部と呼ばれるようになった。⁽²⁴⁾

前身を持たず、高等教育を提供することを目的として設立されたのが、金陵女子大学である。1907年の「中国宣教百年会議」の勧告の一つに、宣教会の協和事業による女子大学の開設があげられていた。これを受けて1911年、英米系の浸礼・基督・美以美・監理・長老会の5宣教会が、その設立を決定したものである。当初は華中をその候補地としていたが、1913年、南京が新首都になると言う予想のもとに、この市に設立され、翌々年に学生8名で出発したのである。

1916年には、アメリカのスミスカレッジや中国YWCAより金銭的援助を受けて、校勢の拡大に努力した。その結果、1923年にキャンパスを移転して、施設を充実させることが出来た。そのことは同時に、金持ちのための学校という評価を作ってしまった。しかし、最初の卒業生の半分は外国留学し学位を取得したということであり、その後の中国知識人の形成に大きく関わっていったのである。⁽²⁵⁾

華南女子大学は、1859年開設された福州女子寄宿学校に発する。1899年に中学校を増設し、英語学習を望む裕福な女子を集めていた。1904年、華南農村における婦人伝道のリーダー養成を期して、大学設立の動きが広まった。1908年、美以美会のもとに予科となる学校が設立され、1911年、定礎式を行った。校名は大学と名乗っていたが、実際に大学教育を提供したのは、1915年以後のことであるらしい。その年は生徒9名であった。

華南女子大学の建物は完美さを誇っていたが、学生数は少なく、絶え間の

ない財政危機に直面していた。キリスト教の雰囲気強く、学生のほとんどは信徒であった。1926年までに38名の卒業生を見たが、その内24名はミッションスクールの教職員として就職している。9名は進学し、残りは教会やミッション系の病院で働いている。⁽²⁶⁾

その他に、南京金陵神学院女子部、夏鳴・北京協和の二つの女子医学校が、高等専門教育を施していた。今まで述べてきたこれらのミッション系女子高等教育機関は、キリスト教社会へは大きな影響を与えていたが、中国の国民生活から極めて孤立したものになっていた。これらの学校の教育内容や構内環境は、中国の需要に合わせると言うよりも、本国の欧米諸国のそのひきうつしであったからである。教科内容は高度であり、構内はエキゾチックな雰囲気に満ちていた。しかし、それまでの身分に縛られた女性観を脱し、新時代の教育者、社会改良家として活動する多数の中国女性を養成し、中国高等女子教育の不備の空隙を埋めたのであった。

3. 五・四以後におけるミッション系女子教育の位置と役割

(1) 壬戌学制による男女平等教育の実現

1919年5月4日、北京の数千の学生は激しい反日デモを行った。このデモは政府の対日姿勢を攻撃する反政府運動となって、学生のみならず、文化人、労働者、市民を含む全国的規模の民族運動にまで発展した。これらの学生を思想的に準備したのは、1915年から始められていた新文化運動である。この運動は、封建的な儒教思想の重圧から人々を解放し、民主主義と科学的精神をスローガンとする伝統批判の啓蒙思想に基づくものであった。

このときに、教育改革を求める運動が中国各地に起こり、それを受けて成立したのが壬戌学制である。これはアメリカの影響の強い6・3・3制を採用したものであった。女子教育について言えば、ここで初めて「両性双軌制」が完全に崩壊したことになる。男女の教育における差別は撤廃され、完全な男女平等、男女共学になった。

高等教育も女子に解放され、1919年、北京女子師範が高等師範になった。

翌年には北京大学や南京・北京両高等師範が女子に解放され、女子教育は大きく前進した。⁽²⁷⁾ 高等普通教育や専門教育は女性の幸福、女性の諸権利の一つとして認められるようになった。

(2) ミッション系女子教育の位置と役割

この様に5・4運動以後、男女共学が認められ高等教育も女子に解放された。ここに至って、ミッション系女子教育が近代女子教育の開始、更に女子高等教育の導入に於て果たした役割は既になかった。しかし、ミッション系の諸学校はまだ多くの中国人女子を集めていた。例えば表1にみるとおり、

表1 中国の女子大学生（1922年—1923年）

大学の種類	校数	学 生 数			女子学生の割合
		男子	女子	計	
国立大学	30	10,130	405	10,535	3.84%
省立大学	48	9,794	7	9,801	0.07%
私立大学	29	10,399	125	10,524	1.19%
ミッション系大学 外国人経営大学	18	3,670	350	4,020	8.71%
合計	125	33,993	887	34,880	2.54%

<資料出所>

Chindon Yiu Tang ; *Woman's Education in China*, 北京
1923 (中華教育改進社プレティン9), p.25

ミッション系大学の女子学生は、実数としては国立大学のそれに比し少ないが、女子の割合は国立大学におけるよりも高い。男女共学になったものの、国立大学に於ける女子学生はまるで縁飾りのように少数であった。ミッション系大学の女子学生数は表2のように増えることはあっても減ることはなかった。

中学校の場合も、官公立や非教会系私立の女子教育の実績は挙がっていなかった。中国における女子教育は新しく始まったばかりであり、中学校教育への関心は低く、ミッションスクールの活動の余地は豊富に残っていた。この様に中国女子教育の全体的な遅れの中で、ミッション系女子教育はその存

在意義を失うことなく、多くの中国人女子の教育に携わったのである。

しかし、1920年代後半、中国全土にナショナリズムの嵐がまきあがり、ミッションスクールは、その嵐のまっただ中に投げこまれてしまった。やがて1926年に始まる北代の過程において、その成果は国民政府の外国人経営学校に対する規制策として現れてくるのである。このため、ミッションスクールにおいては宗教教育の地位が急激に低下し、学校管理権が中国人の手に移されたが、多くのミッションスクールは、中国のキリスト教主義学校として存在し続けることになる。これらの学校による女子教育もまた確固たる位置を依然として占めていた。女子高等教育の分野ではリーダーとしての地位を継承していたが、特に医学教育では、重要な一翼を担っていた。

また、師範教育の分野においても、中国社会への貢献が顕著であった。五・四以後、社会構造の急激な変化に伴ない、女性の教育の必要性が高まった。女性教師の需要ののびに応じて、ミッション系大学の卒業生が国立学校、省立学校で活躍したのである。中国教育の最も緊要な課題は、良質な小学校教師の確保であったが、ここにおいても、ミッション系女子中学校は中国教育に一定の役割を果し得た。ミッションスクールのみならず、中国公私立学校へ多数の教師を送りこんだからである。⁽²⁸⁾

おわりに

以上見てきたように中国における近代女子教育の発展の中で、ミッション

表2 ミッション系大学の女子学生

大学名	女子学生数	
	1920年	1925年
嶺南大学	23	29
金陵女子大学	55	137
華南女子大学	14	80
滬江大学	9	68
齐鲁大学	0	53
東呉大学	0	6
金陵大学	0	27
華西協合大学	0	8
雅礼大学	2	6
燕京大学	14	116
合計	117	530

<資料出所>

J. Lutz; *China and the Christian Colleges 1850-1950*, p.137

系女子教育はその導入者としての役割を果たしたいといえよう。女子に対する学校教育を最初に開始し、女子教育に対する国民的自覚をよびさます役割を担ったのである。女子高等教育に関しても、ミッション系女子大学がその導入者であり、開拓者であったことはいうまでもない。次いで、中国女子教育の全般的遅れの中で、ひき続きその地位を保ち、中国公教育を補完する役割も果たした。特に、女子高等教育の分野では、大きな地位を占め、医学教育や師範教育の分野ではリーダーとしての役割を果たしてきたのであった。これらの専門分野におけるミッション系女子教育の貢献については、資料的制約から十分な実証的な検討ができずに終わってしまったのであるが、ミッション系女子教育が中国女子教育の発展に大きな足跡を残してきたことは、ここに明らかにできたと思う。

注

- (1) M. Burton; *The Education of Women in China*, New York, 1911, p.21
- (2) China Educational Commission; *Christian Education in China*, New York, 1922, p.255
- (3) 程謫凡『中国現代女子教育史』1936年, p.19によると、「男子は一生学ぶ, 女子は十年を過ぎず」と言われた。
- (4) 教育法規については多賀秋五郎『近代中国教育史資料』清末編, 民国編上・中に依拠した。
- (5) Aldersey. 3年間の活動後, 病を得て帰国した。彼女の学校は寧波の長老会女学校に統合された。
- (6) 平塚益徳『平塚益徳著作集Ⅱ 中国近代教育史』p.56
- (7) M. Burton; op. cit. p.40
- (8) ibid. p.42
- (9) ibid. p.37
- (10) China Educational Commission; op. cit. p.256
- (11) M. Burton; op. cit. p.53

- (12) *Records of the Triennial Meeting of the Educational Association of China* (1899, 5/17-5/20, 上海), 1971, 台湾を参照
- (13) Eliza Bridgman, American Board of Christian Foreign Missionsの宣教師。北京に乞食の少女たちのための学校を開設した。これはBridgman Academyとなったが、やがて高等教育も提供するようになる。
- (14) Young John Allenのこと。(1836-1907) メソヂスト派の宣教師として、中国において宣教事業はもとより、教育事業、新聞事業に努力した。特に「広学会」による『万国公報』は有名。
- (15) 校長はLaura Haygood, その章程は『万国公報』光緒17年2月号, 30年7月号に出ている。英文名McTyeire Girls Schoolである。江宗海「上海中西女塾」『中華基督教会年鑑』1916年版所収参照
- (16) 梁元生『林樂知在華事業與万国公報』p.51
- (17) M. Burton; op. cit. p.112
- (18) M. Burton; op. cit. p.100
- (19) 程謫凡前掲書p.71
- (20) 同上 p.57
- (21) 俞慶棠「三十五年来中国之女子教育」『最近三十五年之中国教育』上海, 1931, p.182
- (22) 陶知行「中国建設新学制的歴史」舒新城編『中国新教育概況』上海, 1928, p.4 程謫凡前掲書p.98によれば教育部は1916年, 女子学生の自由結婚を禁止する通令を発している。
- (23) 甘乃光「嶺南大学男女同学之歷程」『教育雜誌』12-7所収
- (24) J. Lutz; *China and the Christian Colleges, 1850 - 1950*, Cornell University Press, 1971, p.133
- (25) J. Lutz; op. cit. p.135
- (26) ibid. pp.133-134, 他に麦美德「中国基督教女子高等教育概論」『中華基督教会年鑑』1916年版所収に詳しい
- (27) 張默君「十年度之女子教育」『新教育』4-5, p.735

- (28) J. Rutzの前掲書V章は、専門分野におけるミッション系女子高等教育の貢献について考察している。しかし、この面の研究はまだ十分に進んでいない。

CHINESE EDUCATION
FOR WOMEN AND MISSION SCHOOLS
1844 – 1919

Hisako Satō

In old China, most unfortunately, some scholars believed that women's virtues had not gone hand in hand with knowledge. And as a consequence, the importance of public education for women was relegated to the background. Not many young girls went to the rural school. If a girl was fortunate, she would be taught from five to about twelve years old by a tutor. As she reached a certain age, say twelve or thirteen, she usually began to be separated from her male relatives and associates. She learned domestic tasks under the guidance of her mother or grand-mother.

In 1834, a group of English women started an organization known as "The society for Promoting Female Education in the East." When the five treaty ports were opened to foreigners in 1842, Miss Aldersey went to Ningpo that year, and two years later, established the first modern Chinese school for girls. On one hand, the first girls' school established and supervised by Chinese was opened with difficulty in Shanghai in 1897. On March the eighth, 1907, the Chinese government issued thirty-six regulations for girls' normal schools and twenty for girls' elementary schools. On this memorial date women's education first had a place in the governmental educational system of China.

The missionary educators realized the importance of education for girls. Numerous primary and secondary schools for girls were founded during the nineteenth century by missionaries. But even to Chinese Chris-

tians, the education of their daughters hardly seemed desirable, especially if the girl's chances of a good marriage were reduced because of big feet. In early twentieth century, with the growth of Chinese society, mission schools for girls gained general assent. Some educators were talking of raising the level of their schools to that of colleges. From 1919 a number of universities and colleges became co-educational. By the time, there were only three women's colleges and they were Christian colleges. Yenching College (formerly Union College for Women in Peking) was started in 1908. Ginling College was opened in 1915. Hwa Nang College began work above the middle school in 1914.

Thus the mission schools became the pioneer of education for girls. Christian colleges also became the pioneer of women's higher education. They maintained their leadership in the relative emphasis given to female education.